
闇の夢

西水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の夢

【Nコード】

N07981

【作者名】

西水

【あらすじ】

高校生の隼人は、学校で虐めを受けていた。逃げられない現実。過去の記憶。そして、毎晩見る『闇の夢』。それらは彼の心を貪り、壊し、そして成長させていく。やがて彼は、現実の光と闇を見つけ出す――。

第1話 夢と現実

僕は闇の中を走り回っていた。

そこは夜という訳ではなく、ただ光が殆ど無いだけだった。世界からありとあらゆる光が消え失せている。しかし、僕には何故か周りに何があるかが見えた。

ここは僕の家の手前の道路だ。そして、このまま走っていくと正面には駄菓子屋があったはずだ。

僕はそんな事を考えながら、ひたすら足を動かし続けた。

ひたひた。

僕の数メートル後ろから、何かが跣で迫ってきているようだった。そいつは僕の少し後ろをぴたりとくつついている。

僕が走って距離を離そうとしても、そいつはその距離を保とうとする。

僕が立ち止まると、そいつも立ち止まる。

そいつとの間は開くことなく、かといって狭まることもなかった。ただそいつは、まるで背後霊のように僕の跡をつけていた。

僕は破裂しそうな心臓を酷使し、一メートルでもそいつから離れようとする。

走って、走って、走り続ける。僕はひたすら、ただ恐怖に突き動かされるように逃げた。

やがて、いつも通りの朝がやってくる。

僕は布団から起き上がると、時計を確認した。時間としては普段僕が起きている時間だったので、僕はそのまま起床した。

汗でぬれたシャツを着替えると、僕は学校へ登校する用意をした。

毎晩僕は、何かに追いかけてられている夢を見ていた。

何に追いかけてられているかはいつも分からない。ただ、圧倒的な恐怖を感じて僕は逃げ惑う。捕まったことは一度も無いし、逃げ切ったことも一度も無かった。

追いかけてくるだけで、捕まえようとしな。その奇妙さが、さらに僕の恐怖心を煽った。

暗闇で未知のものが接近してくる恐怖は、夢とは思えられないほど鮮明で、常に現実的なものだった。

学校に行っても、誰とも会話をしない。いや、誰も僕と会話をしようとしな。僕が話しかけようとする、人は僕を避けるように遠ざかってしま。う。

途中から僕は、自分から話しかけるのを止めた。

そして僕は、クラスからどん孤立していった。完全な孤独。それはカッコいいものではなく、ただ闇のような暗さが在るだけだった。

中学の頃は、そんな事は無かった。しかし、中学の途中で転校してから、少しずつ僕の生活は崩れていったのだ。

何が原因だったかは分からない。何が決定的だったかは分からない。それでも僕は、周りとの壁を感じるようになっていた。その壁は次第に分厚く、強固なものへとなっていった。

やがていつのまにか、僕は虐めの対象となっていた。

何が気に食わなかったのかは分からない。ただ単にストレスのはけ口を探していただけかも知れない。僕はある日唐突に靴を隠され、そして財布を盗られた。

やがて教科書が破られるようになり、椅子に画鋲が散るようになり、靴はいつまで探しても見つからないようになった。

暴力が振るわれ、僕はそれから逃げたくて父親の財布から金をとって学校に行くのが日課になっていた。

僕は全ての現実から逃げ出したくなっていた。

僕は小学生の頃、一人の女の子と良く遊んでいた。それは何も特別な感情があったわけではない。恋人なんてのはもっての他だった。ただ僕らは家が近くて、外で遊ぶ時は何故か一緒に遊ぶことになってしまっていたのだ。

「瑞樹は、生き物で何が好き？」

僕が彼女に聞くと、彼女は長く、艶のある髪を右手でいじりながら考える。

「ボクは鳥が好き」

そう答える瑞樹は、どこか寂しそうだった。まるで世界で自分しか存在していないような、そんな孤独感を彼女から感じた。

「ボクは鳥になって、空を自由に飛びたいんだ。そうしたら、きっと自分の大好きな世界に辿り着けると思うから」

僕には、彼女が何を言いたいのか全く分からなかった。

ただ、彼女は何かを諦めている、ということだけは漠然と分かった。彼女の目と、僅かに震える声が、それを物語っていたからだ。

瑞樹は全てから逃げたいと思っているのか。ある日突然自分の前から消えてしまったらどうしよう。そんな恐れが僅かに僕の心を覆った。しかし、そんなことは次の日には忘れてしまっていた。

殴られる。

人気の無い校舎の影で、僕は三人の生徒に囲まれていた。そうやって逃げられないようにされて、僕は殴られた。そして蹴られた。そして踏みつけられた。

理由は単純で、今日は金を持ってきていなかったからだ。

いつもいつも金を巻き上げられる。その金額は最初に比べて、十倍ほどに膨れ上がっていた。父親の財布から盗るのが嫌になり、そのまま学校に来たらそれが咎められる。

だから、これ以上迷惑をかけたくないと思いながらも、父親のお金を取ってくるしかないのだ。

そうやって暴力から逃げるしかないのだ。僕は弱くて、彼らには到底適わないだろうから。

蹴られ、殴られ、暴言を吐かれて、やがて彼らが去って行くのが分かった。僕は心底からほっとした。もう殴られなくてすむ。そして、それが毎日続くようにちゃんと明日はお金を持って来よう。

そんな情けない自分に、涙が止まらなくなった。

完全な闇。それだけが、自分の目の前に広がっていた。光一つ見えない。無明の闇。それは完全に僕を覆いつくし、静かに僕の心さえも蝕んでいるようだった。

泣いても泣いても、何も解決しないのは分かっているのに。

涙をいくらながしても、僕の居る現実は何一つ変わらないはずなのに。

それでも僕は、ただ人気の無い場所で泣いていることしか出来なかった。

小学五年生ぐらいだったと思う。

その頃から、僕はだんだんと瑞樹が苛められていると気付いていた。理由はどうだったかは、僕は違うクラスだったから分からない。ただ彼女はその頃にはもう人前で笑わなくなっていた。

彼女の顔に浮かんでいたのは、完全な虚無。

小学生の虐めは酷いものだった。完全な無視から始まり、暴力や暴言まで、虐めの実態は幅広かった。

僕はそんな現状を知って腹がたった。瑞樹を苛めている奴を、みんな殺してやりたいような衝動に駆られた。しかし、実際には僕は何一つすることが出来なかったのだ。

自分が苛められるようになるかもしれない。

そんなどうしようもない恐怖に、僕の怒りは押さえつけられた。彼女にはかわいそうだけど、自分で頑張ってもらうしかない。そう思うようになっていた。

既に瑞樹の傍に、僕は存在しなくなっていた。

その日の夢も、暗闇の中で誰かに追いかけられる夢を見た。相変わらずつかず離れず、僕の後ろをひたひたとついてくる。僕は泣き喚きながらそいつから逃げ回った。

絶対捕まりたくない。捕まったら絶対に助からない。

そんな恐怖が僕の足を突き動かしていった。

——お前はまだ逃げるのか。

どこからか、声が聞こえた気がした。僕は走るスピードを、もつとあげた。

——そんなに闇が恐いのか。光が無いことが、そんなに恐いのか。

聞こえる声を見殺して、僕はひたすら走った。

第2話 夢と過去

あの日の夕暮れ。僕は小学校のグラウンドで友達と遊んでいた。その中に瑞樹の姿は居なかったし、それに僅かな躊躇いも感じなくなっていた。

彼女は僕の傍には居ない。

瑞樹とは顔を合わすことさえしなかったし、言葉を交わすことは既に一年ぐらいしていなかった。彼女は完全に孤立し、学年の中でも浮いている存在だった。

「――あの女さ、なんかむかつくんだよな」

友達の一人が言った。彼の意識はボールに注がれており、何も考えずに口から漏れた言葉のようだった。

「分かる分かる。何かうざいんだよ。うまく言えないけどさ」

「なんであんな奴がこの学校に居るか分かんねーな」

「ははは。そりゃそうだ。ただこの学校に恥をかかせてるだけなのにな」

僕の友達は、瑞樹の話題で盛り上がっていた。ボールを投げながら、彼らは楽しそうに彼女の話をする。まるで昨日のドラマについて語るように、彼女の悪さを指摘しあう。

「だいたい。なんかいつも臭いんだよな」

そんなはずは無かった。小さい頃から僕は彼女と共に居たけど、彼女の髪はシャンプーの良い香りがしていた。

「確かに。あんまり近寄りたくないよな」

「ま、意識しなくても誰も近寄らないけどな」
軽く談笑する。

彼らにとっては、特に何でもない会話なのだろう。あくまで手軽な話題の一つとして、僕の「友達」たちは話している。

夕日が傾いてくる。鳥が空を飛び、やがてスピーカーから五時を知らせるチャイムが鳴った。僕らはその場で適当に挨拶をすると、

学校から去って行った。

僕は家が近く徒歩で来ていたため、みんなから置いてかれる形になった。

僕は小さくため息をついた。僕の息は見えない何かに吸い取られていくような気がした。僕はたった一人で家へと向かった。

そして、帰り道には彼女が居た。

僕らがさっきまで話題にしている、学年で最も浮いているだろうである彼女。

瑞樹は転んでいた。

ひざを擦り剥いたらしく、結構大きな傷が出来ていた。そして何故か、額から血がどくどくと流れている。瑞樹は運動神経が悪い方ではなかったから、決して転んで頭を打ったわけではない。転んでもとっさに受身を取り、頭を打つなんていうまぬけなまねは彼女ではないはずだった。

彼女は僕に気付いて顔を上げた。

艶のあった長い髪はくしゃくしゃに乱れ、綺麗な目には涙を溜めていた。しかし、僕の知っていた瑞樹とは違い、唇を強く噛んでいた。彼女は以前は、そんな事はしなかった。

僕はその横を、何事もなく通り過ぎようとする。

彼女の怪我を手当てしようなんてものなら、きっと僕も苛められてしまう。人の気配が無いなら良い、とは思わない。どこかから見かけるかもしれないし、彼女自身が言うかも知れない。

だから、僕は彼女を助けられない。

僕は胸に罪悪感を感じながら、その横を通り過ぎた。彼女の目は最初から見ず、ただ何も無いように意識しながらその場を歩く。

「――隼人」

瑞樹は掠れた声で僕の名前を呼んだ。それは聞き慣れていた声とは違っていた。

「隼人。ボク、怪我しちゃった。ハンカチか何か持ってない？」

瑞樹は言う。

「無いんなら、家まで送ってよ。……足、挫いちゃった」

僕は歩きながらそれを聞いた。

やがて、彼女は泣き出した。静かな嗚咽が後ろから聞こえ、思わず僕は足を止めた。そして背中を向けたまま、そこに佇んでいた。

日は沈み、段々と辺りが暗くなっていく。ほのかな青い光さえ、僅かになっていく。

やがて、歩き出すタイミングを見失った僕に、彼女は言った。

「ねえ。――ボクを助けて」

それは懇願しているようで。慟哭のようで。僕は耳を塞ぎたくな
った。

もういやだ。と僕は思った。

もう嫌だ。もう嫌だ。なんでこんなことをしないといけないんだ。

僕は彼女の台詞に、命の全てが抜き取られたような脱力感を味わった。

僕は、――歩き始めた。

彼女を置いて、その場を一步でも離れようと。鉛のような足を動かし、痛む心を鉄にして、僕はひたすら足を動かし続けた。彼女が何か言う声が聞こえたが、僕は聞こえなかった。

ずっと、ずっと歩き続けた。自分の家を通り過ぎ、やがて自分の家でさえ見えない位置までくると、僕はようやく足を止めて、後ろを振り返った。

そこには誰も居なかった。

僕はその時、涙を流している自分に気がついた。視界がにじみ、風景が殆ど見えない。

涙を流す僕の頭上では、既に星が光っていた。

僕は地面に這い蹲りながら思った。

きつと瑞樹は、あの時どん底に居たのだ。そして彼女は最後の力を振り絞って助けを求めた。しかし、その願いは伝わる事が無かった。だから、だから彼女は――

――次の日、アパートの屋上から飛び降りた。

瑞樹はその時、何を思っていたのだろう。それはきつと、今の僕が考えていることと変わらないと思う。僕だけじゃない。きつと世の中には僕と同じ事を考えている人が沢山いるだろう。

僕は、全ての現実から逃げ出したい。

そんな事は誰にも出来なくて、僕はその無力さに自分を呪った。現実から逃げ出せない自分の弱さと、虐められるようになった自分のまぬけさと、――彼女を助けようとしなかった、自分の情けなさを、僕は呪った。

アスファルトの硬い地面が、僕の頬を傷つける。

身体の節々が痛く、もう少ししなければ立ち上がることも出来ないだろう。その状態で、僕はそこに這い蹲っていた。

太陽は燦々と輝き、沢山の人間に光をもたらしめている。光が届かない人間も居るということを、太陽は知っているのか。どれだけ明るい光でも、現実という闇を照らすことは出来ないということを、太陽は知っているのだろうか。

やがて僕は目を閉じた。

このまま無になってしまいたかった。出来れば自分の身をミクロ単位にバラバラにして、この世から抹消させたかった。こんな恐ろしい世界に存在することが、本当に嫌だった。

気がついたら、僕は闇の中にいた。僕はきよろきよると見直し、静かに歩き始める。

しかし僕が歩き始めても、僕の後ろには何の音もしなかった。いつも夢の中で僕を追いかけてくるあの気配は、まったくしなかった。僕はそれを奇妙に思いながらも、僕は自分の家へと向かった。真っ暗な中でも、自分にはそこがどこか分かる。まるで輪郭だけ切り取られたような影絵の世界の中に居るように、僕は感じた。

僕は自分の家に行く途中、彼女に出会った。

「……瑞樹？」

僕は転んで涙を流している彼女を見て、知らぬ間に呟いていた。それは恐れだったのか。それとも後悔だったのか。僕の声は自分でも分かるくらい震えていた。

「隼人？——今更何しにきたの？」

彼女は僕を責めるような口調で言った。

「何をしにきたの？ もう全部終わってしまったというのに。ボクが屋上から飛び降りた時、ボクは全部を終わらせたのに」

「……それは、違う」

僕は祈るように言った。

「何が違うの？ ボクは四階建ての屋上から飛び降りた。そして、ボクは君の前から消えた」

「違う！ 僕が知ってる記憶は、瑞樹が屋上から飛び降りて、それでも一命を取り留めた記憶だ！」

「——確かに、一命は取り留めた。だけどそれは、命だけ。後のものは、全部なくしちゃったよ」

彼女はそこまで言って、何も返せない僕に畳み掛けるように言った。

「酷いよ」

「――っ」

「酷いよ。もし隼人があの時助けてくれたら、きっとボクはそんな短絡的な事には手を出さなかったと思う。だけど、――君はボクを見捨てたから。ボクをどうでも良いと思ったから。それが分かったから、ボクは絶望したんだ」

「……だけど、しょうがないだろうっ!? 僕は恐かったんだ! 君を助けて、世界に捨てられるのが恐かったんだ。……傷つくのが怖い。だから僕はずっと自分に嘘をつき続けるんだ。そうしないと、僕はすぐに死んでしまう」

僕は叫んだ。

自分が何を言っているのか分からなかった。彼女が死んだとき、僕は心の底から後悔したはずだった。だけど、彼女を目の前にして口から出てくるのは、ただの言い訳しかなかった。

ほんの嘘っぱちしか、僕の口は話せないのか。それとも、――これが真実なのか。

「君はボクを見捨てた。そしてボクは死んだ。……隼人がなんて言おうと、この事実はまだたく揺るがないよ。そして、ボクはそんな隼人をきつと永遠に許さない。普段は友達の面をしていて、いざという時に助けてくれない。そんな君を、ボクは絶対に許さない」

僕は意識が浮上していく感じがした。もうすぐ朝で、僕は目覚めようとしているのだ。

意識が夢から現実へと移る中、彼女は最後に言った。

「――私は最後の最後まで、君を友達と思っていたのに」

僕は彼女の寂しそうな声を、薄れ行く意識の中で確かに聞いた。

第3話 夢と再会

僕はその日病院へと向かった。

僕の祖母は重い糖尿病で、現在は入院しているため、そのお見舞いに行く日だったからだ。僕の顔を見ると祖母は喜ぶと、僕の親は言うのだが、こんな暗い顔のどこが人を喜ばせるのか、僕にはまったく理解できなかった。

僕はぼんやりとしたまま病院の敷地に入った。病院の近くには、入院患者らしきパジャマを着た人たちが散歩をしている。今日は暖かいため、外に出ても問題はないのだろうか。

と、その時、僕の背後でガチャンという金属音がした。

「……？」

僕はその音に振り向くと、そこには車椅子が転がっていた。その傍に、女の子が蹲っている。どうやら、彼女は無理矢理車椅子を動かそうとして転んでしまったようだった。

僕は仕方なく、そんな彼女に手を差し伸べた。

「大丈夫？ 派手な音がしたけど……」

僕が出来るだけやさしそうな声で言うと、彼女ははっとこちらを見た。

「えっ？ あ、ありがとう」

「立てる？ ——立てたら車椅子なんて使わないか」

僕は彼女の声に、何か違和感を感じながら、横に倒れた車椅子を立て直した。彼女の目は、どこか夢を見るような表情で僕を見つめている。

「肩を貸そうか？ それとも自分で大丈夫？」

「……ありがとう。貸して」

彼女は小さな声でそう言う。僕は彼女を支え、彼女を車椅子に座らせた。

「危ないから、もう一人で外に出ないほうが良い」

「あっ——」

僕がそう忠告して立ち去ろうとすると、彼女は声を漏らした。僕は疑問に思いながら振り返ると、彼女は言った。

「……少し、話がしたいの。迷惑かな？」

僕は僅かに考えて、返事をする。

「良いよ。僕も暇だったから」

瑞樹はアパートから飛び降り、そして両足を失った。下に止めてあった車がクッションになったのだろう。彼女は足の骨を折りながらも、一命を取り留めた。

しかし、彼女が負った傷は足だけでは無かった。

飛び降りて車にぶつかった、その時の衝撃で飛び散った破片が彼女の目を傷つけたのだ。

そして彼女は、まったく何も見えないほどではないが、視力に異常をきたした。彼女は分厚い眼鏡をかけてさえ、水の中で目を開いているような風景しか見えないようになっていた。

ぼんやりとした視界、はっきりとしない世界。

そんな視力で、どうやってこの先を生きていくのだろうか。僕は小学生のとき、そんな心配をしていた。足はもう使えず、目も殆ど使えない。そんな状態で生きていけるほど、現実とは簡単じゃない。

彼女はその後、直ぐに転校した。

きっと僕らの虐めから逃れるために、親が転校させたのだろう。

それ以来、僕は彼女の姿を見ていない。

「私ね、小学生の時に足を失ったの」

そう言う彼女は、どこか寂しそうだった。

僕と彼女はその後、近くの公園へと向かった。そこには鳩が多く、僕らが近づくとぼつと散っていった。そして僕はベンチに座ると、彼女の話聞いた。

「私はもう歩くことはきつと出来ない。それに、目も悪くなつてしまった」

彼女はそう独白する。

「私にはもう殆ど何も見えない。だけど、だからこそ、この現実から目を反らせられたのかもしれない」

彼女は静かに笑う。僕はそんな彼女は、無理に笑っているように見えた。

「どうして……」

「え？」

「どうして今、笑ったの？ 決して、笑うところじゃないと思ったのに」

僕が言うと、彼女はさっきよりも大きく笑った。

「――笑うところだよ。……うん。笑うところで間違つてない。笑うべきところだと私は思ったから、笑った」

僕は釈然としなかった。

太陽が沈み始め、あたりの景色は朱色に染まり始める。僕はたった二人、この世界に取り残されているような錯覚をした。

「僕は、笑うところじゃないと思うよ……」

言うと、彼女は少しだけ泣きそうな表情になった。儚げで、僕はその表情にドキリとさせられる。

「悲しいときには、笑えば良い。そうすれば、きつと楽しくなるはずだから」

彼女は何でもないように言った。

そんなこと、あるはずもないのに。悲しいときに笑っても、余計に悲しくなるはずなのに。それなのに、彼女は笑えば楽しくなると

信じているのだろうか。

「悲しいときには泣くんだ。それが普通だし、無理しても意味なんてないと思う」

「意味はあるよ。笑えば、きっとよくなる」

「……悲しいのに笑うなんて、馬鹿みたいだ」

僕は自分の声が震えていることに気がついた。きっと彼女もそれを感じたのだろう。彼女は言った。

「私は小学生の時、とっても嫌な体験をした」

僕は何も言わずに聞いた。

「私はみんなに虐められて、無視されて、……私はもう全部が嫌になっていった。もう死んじやいたかった。なんでこんなところに自分がいるのだろうつて、疑問に思った」

唇を噛み締めながら、彼女は言う。

「だけど、私が嫌な体験って言ったのは、そんなことじゃない。私が一番嫌だったのは――」

――友達に、助けを求めてしまったこと。

これが私の最も嫌だったこと」

彼女はそう言って、僕のほうを見た。その目は真剣で、僕は息を呑んだ。

「私は彼に、無茶なことを言ってしまった。助けを求めても、助けられる訳がないのね。……だから、きっと彼は、どこかで私のことに責任を感じている。きっと彼は、私のことをずっと引きずっている」

僕は頭がくらくらした。

全ての常識がひっくりかえり、その中に取り残されているような感じがした。

「君は……、彼を恨んでいないの？ 助けを求めて、それを無視されておきながら、君は恨まないの？」

僕がかすれる声を絞り出すと、彼女はおかしそうに頬を緩めた。

「おかしなことを言うのね。——恨む訳ないじゃない。だって私は、彼と友達だったんだから」

心の奥で、何かが軋んだ。

「もし——」

「……？」

「——もし彼が、君の事をなんとも思っていないくて。罪の意識なんて感じていなくて、それでいて、ぬくぬくと自分の生活を楽しんでいたらどうする？ そんな時も、彼を友達といえる？」

「……彼は、罪の意識を感じないような人間じゃないもの。だから、仮定自体がなりたたないよ」

「だけど、だけど、彼は」

僕はその先を言葉にすることが出来なかった。目に涙が溜まってきて、視界がぼやける。

「……彼は、きっと後悔している。はたから見てもそれは分からないかも知れない。……彼は、いつも自分も含めて、全員に嘘をついているから。もしかしたら平気そうに見えるかも知れない。だけど、だけど彼は——」

——とても、やさしいから。

とてもやさしくて、綺麗で、まっすぐな心を持っている。それを私は、小さい頃から知っているもの」

もう、涙はこらえられなかった。涙は頬を流れ落ち、ベンチの染みになっていく。僕は嗚咽を押し殺して彼女に気付かれないようにするのに精一杯だった。

「彼はきつと私のことに責任を感じている。だから私は、がんばって生きないといけないの。彼に重いものを背負わせてしまったから、私は楽に生きていけるはずだから。……ちゃんとその分、生きていけないといけない」

どこか遠くを眺めている彼女の瞳は、強く輝いていた。

僕は唐突に立ち上がった。彼女が何か声をかけようとするが、僕は彼女を無視して走り出す。一目散に彼女から遠ざかっていき、それでもずっとずっと走り続けた。

走りながらも、涙が止まらなかった。風に飛ばされ、涙が散っていくのが分かった。

それは何に対する涙かは分からなかった。ただ、僕は心の底から何かを叫びたい気持ちになっていた。

「ねえ、隼人の将来の夢って何？」

夕暮れの中、学校の近くの小さな山の広場に僕らは座り込んでいた。

「将来の夢？」

僕が呆然として訊きかえすと、瑞樹は大きく頷いた。

「そう、将来の夢。大きくなったら警察になりたいとか、そういう事」

「瑞樹の将来の夢は？」

僕が尋ねると、瑞樹は恥ずかしそうに言った。

「ボクの将来の夢は、本を書くことなんだ」

「本を？」

「本を書いて、沢山の人に読んでもらいたい。そして出来れば、沢山の人に感動してもらいたい。そしてそして、出来れば沢山の人の心に、小さな光を灯してあげたい」

彼女はとても生き生きとした瞳をしていた。それが特に夢のない

僕にはうらやましく思い。僕はその場で夢を作った。

即興で作った夢ながら、とても素晴らしいと思った。本当にこれを夢にして、がんばって勉強していこう。そして夢をかなえてやろう。そう僕は思った。

彼女が僕に早く喋るように催促してくる。僕は笑いながら口を開いた。

「僕の夢は――」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0798i/>

闇の夢

2010年12月11日02時36分発行